

Ⅲ 〈3.11〉後—人間関係の危機 - 疎外感に立ち向かう After 3.11: Human Relations Crisis

イジメ共同体をいかにのりこえるか —基礎経験をめぐるヘゲモニー闘争の観点から— How Can We 'Bullying Community' Overcome? : From the Viewpoint of the Hegemony control over the 'Fundamental Experience'

清 真人

KIYOSHI, Mahito

1 問題状況

少年少女期に、その人間が個人的＝実存的人間関係や社会関係についてどのような基礎経験を積むかという問題が、その個人の将来にとっても、またその個人を重要なメンバーとする社会集団の将来にとっても重大な問題となることは、幼少年期の経験が人間の精神的成長にとってもつ重大な規定作用の認識から出発する今日の精神分析的知見を顧みるまでもなく、多くの人が直観することであろう。

いましたが、私は「基礎経験」という言葉を使ったが、この言葉によって指し示したい問題は、人間のなす経験のなかには、その経験が基礎となることによって、その個人の世界観・人間観・人生観・自己像・価値観・美意識・想像力の発揮方向等々が定まる、そういう基底的な作用力をもつ経験というものがあろうという事情である。

「三つ児の魂百までも」の格言は人々が直に自分自身やごく近い周囲から汲み取るきわめて重要で意義深い人生洞察をあらわすものだが、この格言は

われわれにこの基礎経験という問題の所在も示すものにほかならない。

この点で、私は端的に次のように主張したい。

今日の日本の青少年は、第二次世界大戦後世界でも稀に見る平和を享受してきた国であるこの日本に生まれ育ってきたにもかかわらず、或る特別な恐怖とともに育ってきたというべきであり、その恐怖は減どころかますます増強されつつある、と。その恐怖とは、《イジメラレル恐怖》である。そしていまやこの恐怖は日本の青少年が人間関係・社会関係について抱く観念・発想・想像力の発揮を規定する基礎経験の位置にまで侵出するに至っていると。

問題を具体的に示すために、まず私は大学での自分の授業で得たいくつかの学生のレポートの一端を紹介したい。或る学生は自分にとってイジメラレル経験がどのような心理的後遺症を残すかという点についてこう書いている。

「(イジメラレル経験は——清)〔略〕後遺症のよ

うなものに姿を変えていきます。まるで人の言っていることが信用できなくなるのです。他人の発言や行動を悪い風に受け止め、人との交流を極力避ける、この悪循環で、さらに自分自身を暗夜のなかに葬り去っていく、これの繰り返し。〔略〕僕は後に軽いノイローゼにかかりました。誰も信用できない人生、これほど辛い人生はないです。しかし僕は少しずつだけれどわかりかけてきた気がします。やはり、人間という生物は独りでは生きていけない。人に受け入れてもらえない、人に認めてもらえない、人に愛されない、そして人を愛さない、嫌だ。僕は嫌だ。一時は、人を傷つけたり、憎んだり、人を無価値と判断することでしか自分にほんのわずかな心の平安を得ることができなかった。しかし、そんな体験をした人間にはその人間だけに与えられるものがあると僕は思っている。それは他の人よりも少しだけ、他の人の心の痛みをわかってあげられることができることだと思う」(傍点、清)。

また或る学生は大切な友がイジメラレル現場に出会った自分が脆くも「傍観者」へと崩れ落ちるしかなかった、その自分の姿についてこうレポートしている。

「ぼくはそのとき『空気』だった。被害者でもなく加害者でもないただの傍観者だった。傍観者＝空気。否、加害者。最初は正義を盾に彼女をかばっていた。かばっていたという言葉はおかしい。普通に接していた。ごく普通に。しかし、ある日矛先がこちらに向かいそうになった。そして、ある日『正義』は『空気』に姿を変えた。盾はもろくもくずれていった。僕はもろくもくずれていっ

た。ごく普通に。ごく当たり前のように」(傍点、清)。

実はこの二つのレポートは2006年に「私のイジメ経験」をレポートすることを求めた私の授業で得たもので、後に私は他のいくつかのレポートとともにイジメ経験がどのような経験であるかを典型的に示すものとして拙著『創造の生へー小さいけれど別な空間を創る』(はるか書房、2007年)に再録した^①。それからもう7年たっているが、私の直観では事態は明らかに深刻化している。この二つのレポートを得た時点では、このようにイジメ経験が自分に遺した魂の傷を語って強い印象を残すものは全体の8パーセント程という感じであったが、いまではほとんどの学生がこれに類する心の傷を負っていると私は感じている。

今年は二つの大学でおこなったそれぞれの授業で同様のレポート課題を出した。それまでは提出されたレポートから特に目を惹いたものを匿名化したうえでその中の一部分を引用した証言集プリントを作りフィードバックしていた(もちろん学生には事前に了承をとって)。今回は提出されたレポート全てを、名前は伏せてそのまま縮小コピーして台紙に張り、フィードバックすることにした。それほどに、レポートには先に紹介した証言と同水準の証言が溢れていたともいえるし、全公開するほうが、この問題の驚くべき普遍性をその具体的な生々しさにおいて「これが君たちの抱えている問題だろ!」と提示することができると思えたからだ。

その中には次の衝撃的な告白も含まれていた。本来なら全文を引用すべきであるが、紙数の関係からいくつかの箇所を省略した形で示そう。

「小学校の時、私の学年には『当たり年の中の当たり年』と言われるほどの悪評があった。何人かの先生が学級崩壊によってリタイアし、何とかしようと教育委員会から派遣された職員でさえも体調を壊し〔略〕。

私は幼稚園の頃からずっと友達が片手で数えられるほどに少なかった。当然、いじめが始まるまで短くはなく、私を含む4人の子がいじめられることになった。〔略〕主な被害者であった子が自殺未遂をした。〔略〕その後、1人は翌年に他の学校に逃げ、もう1人も〔略〕転校してしまった。結果〔略〕私が主な被害者になってしまった。

ただでさえ辛い日々であるのに、私の父が人を見下し物のように扱う人物なので、家でも学校でも私は苛酷な環境に置かれることになった。毎日、肉体的にも精神的にも傷つけられるため、私の性格はずいぶん歪んだように感じる。〔略〕家での鬱憤を晴らすため、敵を陥れるために学校に行った。もはや私の敵たちは、私の中で人間ではなく、文字通りゴミ以下の存在であった。もちろん、ずっと私の敵に対する殺意はあった。『あいつの心臓にナイフ一刺しでいいのに』『はらわたから何か引きずり出して踏み潰したい』と思うなど、殺すことに罪悪感はなかった。しかし、『殺せば楽しみにしているもうすぐ発売される新刊や新譜に手が届かないのか』と思うと、行動に移すことができなかった。

中学生になると〔略〕父のモラルハラスメントがひどくなり、母を守るために父を殺そうと決めた。どうせなら憎い奴は皆やっしまおうと思い、私はいじめの主犯格のAとその側近もついでに殺すことに決めた。しかし、臆病な私は殺す覚悟がなかなかできなかった。なので、覚悟を決めたら

すぐに実行できるようにホームセンターで鞘付きの果物ナイフを購入し、持ち歩いていて、学校で主犯格のAにいじめられても、『私は油断しているこいつをいつでも殺せる』と思うと胸が躍った。しかし、不思議なことが起こった。家にいるとナイフが消える。いくら探しても見つからないので新たに購入するが、少しするとまた消えるのだ。結局、果物ナイフ数本とサバイバルナイフ1本を購入した記憶があるが、いくら探しても見つからず、3年経った今も果物ナイフ1本見つかっただけである。母に持ち去ったのかと聞いたが、とても驚いた様子でナイフを購入したなんて初耳だと答えられた。私が誰かを殺そうとしているのに気づき隠したのか、私が妄想と現実の区別がつかなくなっていたのか、私ははっきりと断言できない。しかし、母の反応と母が隠さずに私の果物ナイフを使うことから、おそらく後者であろう。

今は、妄想と現実の境界線を曖昧にしたであろういじめを怖ろしく思い、絶対悪だと確信している。しかし同時に、子供の頃のいじめはある程度必要悪の要素も含むのではないかと考えてしまう。なぜなら、私たちの住む社会がいじめを大量生産する環境を作っているからだ。〔略〕」（傍点、清）。

付言すれば、このレポートは「最後に、自らのいじめ体験を語る機会などめったにないので、ここぞとばかり当時思っていたことを正直に書いた部分があります。ご気分を悪くしてしまったならば、お詫び申し上げます」で結ばれていた。

実は、ここまで本稿を書いた日の翌日私は授業に向かい、そこで次のコミュニケーション・ペーパー（授業後、その感想や質問等を書くメモペーパー）を得た。その一通にはこうあった。

「小学生の頃、いじめを受けていて、友達もほとんどいませんでした。それでも学校にいかねばならないと思い、半ば強迫的に学校に通い続けてました。学校が終わると、急いで家に帰り、パソコンをつける生活をしていました。学校で人としゃべる代わりに、チャットで遠くの何人もの人と文字で会話していました。幸運にも同じ年齢の人もそこには何人もいて、ある意味学校の代わりとなる居場所としていたのかもしれない。中学以降は私立に入り、いじめられることも無くなったのですが、その時に知り合った何人かの人たちは今でもリアルな友達よりも仲が良いぐらいの付き合いです（会ったこともあるし、一人は本大学の学生です）。ある意味ネットに救われたようなものだと思っています。〔略〕ただバーチャルな関係のもの（後でリアルとなるが）を小学生時代に構築してきた代償として、私はいわゆる『コミュニケーション障害』に近い状態になっていました。（大分改善されたが）今でも人と話す時が怖いことがあります。文章と違って、会話は見直して相手へ渡すことができないからです。やっぱり〔略〕普通の小学生生活に憧れます」（傍点、清）。

またもう一通にはこうあった。

「最近発達している SNS により、我々にはもはや一人になれる空間はないと思う。〔略〕例えば友人と LINE で会話しているときに『既読』マークを付けたまま返事もせず、ツイッターに何か書いたとする。すると友人は、なぜ返信しなかったの？ と怒りを顕わにするだろう。『返事を送らねばならない』という焦燥感、応答への飢餓が、

このネット社会で生きる我々の最も身近にあるストレス要因であるといえる」（傍点、清）。

長い前置きとなった。

とはいえ、私は思うのだ。いま緊急に必要とされているのは、われわれが実際に立たされている状況の生々しい相貌についての確認と共有化であると。それほどに、われわれはこれまで経験したことがない新状況のなかに放り込まれているのだ、と。

（3.11 はこのことのシンボルとなった。）

では、この私はいま自分が紹介した五つの学生の証言から如何なる問題を引き出すことができ、それをどう論じることができ、何をわれわれが挑戦すべき課題として提起できるのだろうか？ 正直に言って、自分がたいしたことができるとは思えない。むしろ、私は学びたいのだ。私を捉えて離さないこの五つの学生の血の滴る言葉、今日の日本人のあいだを裂断しているデイス・コミュニケーションの血の滴る五つの断面を鮮やかに浮かび上がらすこれらの言葉から、あなたが如何なる問題を引き出し、どう論じたかを。それを学び、私の論理をさらに砥ぎ澄まし、増強し、この五つの言葉に真に応答してやりたいのである。彼らは実にそれを期待している。自分のなかに渦巻いていたかつての殺意をほとんど見ず知らずの教師に対して告白してもなお、その自分の苦悶を解く助言となる応答が欲しいのである。

「自らのいじめ体験を語る機会などめったにないので、ここぞとばかり当時思っていたことを正直に書いた」その意志に、真に応答したい。そのために私は学びたいのである。

しかし、学ぶためには、自分が拙くとも自分の思案というものを人前に晒すことが礼儀というものであろう。

2 イジメ共同体

イジメは大多数のクラスメンバーの「傍観者」＝共犯者化という必須の媒介項を得て、はじめて自分をイジメラレル者とイジメル者とのイジメ関係性として樹立する。今日のイジメ関係性の基本構造は、イジメラレル者から彼のコミュニティーへの一切のコミュニケーション関係性——私はこの関係性のキーポイントをより鮮明にしようと「Call & Response」関係性と呼び換えることを最近しきりにやっている——を剥奪する、《一対全体》の形をとった極端な異者排除の攻撃性からなる。「次第に A を避けるのがクラスの日常となっていくた〔略〕これは A に対するクラス全体のいじめであった」・「次第に A 君への仕打ちはクラス全体へと広がってゆき〔略〕当時の経験、あのクラスの雰囲気は今でも心に残っている」（学生レポートより、傍点、清）。

しかも、このイジメ共同体の成立は、その内部メカニズムとして次の《恐怖から発する共犯者化》を孕んでいる。先のレポートの言葉をそのまま援用すれば、「あのいじめは A 君が悪いどころではなく、弱者をいじめ、優位に立ち、自分たちの地位を保つためだけになされたことだった。そして誰もが次には自分がいじめられるかもしれないという《恐怖》がそのいじめをなくさせることをできなくさせていた」というメカニズムを孕んでいるのである。つまり、イジメ共同体はその内部に「次には自分がいじめられるかもしれない」という内部的な恐怖・不安・猜疑を本質的に孕んだ倒錯的で自己欺瞞的ないわば疎外された共同体なのだ。別な言い方をすれば、それはメンバーの積極的な「全体」関与＝自己贈与、メンバーの一人一人の「持ち味」つまり個性の深い承認と擁護、かかる相互承認が織り上げる相互補完性・相互支持性・相互擁護性を讃える全体感情、つ

まり仲間であることへの友愛感情の高揚、それらを前提にして初めて成り立つはずの《共同性》が、奇妙なことにそれら諸要素の全否定——無関与つまり徹底的なる自己防衛と保全・無関心・シニックな不信・冷感性——と見える諸メンバーの「傍観者」化によってこそ成り立つ奇妙な共同体、反共同性に内部腐食した共同体なのだ。

私見によれば、教室空間をイジメ共同体空間として経験しなければならないというこの事態の深刻性がよく理解されるためには、それが孕む実存的問題性が十全に把握されなければならない。『心的外傷と回復』を書いた J・ハーマンはおそらくエリクソンに学んでこう問題を提示した。すなわち、「世界の中にいて安全であるという感覚、すなわち〈基本的信頼〉は人生の最初期において最初にケアしてくれる人との関係の中でえられるものである」（ハーマン 1996：76）と^②。またこうも指摘した。「世界には意味があるという信念は他者との関係において形成され、その開始は誕生直後に遡る。最初の親密関係において築かれる基本的信頼がこの信仰の基礎となる」（ハーマン 1996：81）と^③。

この観点からいえば、イジメラレルという経験の実存の意味の核心は、上に取り上げられていた「基本的信頼」のいわば第二次危機——第一次を乳幼児期のケア経験の有無にかかわる実存的危機の問題とすれば——にある、といい得る。幼少年期の次に来る少年少女期から思春期への第二次形成期において、あらためてこの実存的危機の問題が、今度は子供たちにとって最初の社会経験の主戦場ともいえるべき学校世界において、まさにイジメというきわめて今日的な普遍的な現象によって引き起こされ襲いかかるのだ。その場合の問題軸はいうまでもなく親子の愛の絆の有無ではなく、「親密圏」の外にある社会的

存在としての人間にとって最もポジティブで

エムパワーメント

有力化の源泉となるはずの友情の絆の有無に置かれる。(前述の自分のなかに殺意が渦巻いたことを告白するレポートは、第一次と第二次の人格形成の基盤時期を刺し貫く形で、本来なら自分の「最も親密な他者」として享受すべき他者を殺害対象として見いださざるを得ない窮境に追い詰められた子供の苦悩を語って、あまりある。)

先に紹介した五つの証言はこの問題地帯が今日いかなる苦悩の火焰で焼けてだれているかを示してわれわれの胸を刺す。友であるはずの存在は殺害対象と成り果てるか、そこまでいかなくとも裏切り者あるいは傍観者となり、もはや日々の生活の実践を共にする友ではなく、しかもいまや LINE 上の監視者、応答のツールであったはずの LINE を「既読」マークを梃子に監視システムに反転させる《私の監視者》と成り果てるのだ。

かつてエーリッヒ・フロムは「責任」という言葉の語源的意味を論じてこう述べたことがある。「今日では責任感という、たいていは『義務』、つまり外側から押しつけられる何ものかとみなされている。しかし本当の意味での責任感とは、完全に自発的なものである。責任感とは、表明されたものであるにせよないにせよ、他の人間存在が抱く欲求へのわたしの応答である。誰かにたいして『責任がある』と感じることは、『応える』ことができ、その用意がある、という意味である」(フロム 1991: 50) (4) (傍点、引用者) と。

つまり、「責任」に当たる英語は responsibility だが、それは^応response という言葉と^能ability という言葉が合体して出来上がった言葉であり、その根源にあるのは応答する自発的感情、いいかえれば連帯感情という応答能力の基礎中の基礎に対する注目だ

というのだ。応答のツールであるはずの LINE が相互監視のツールへと反転するという事態は、右のプロムの一節を思い起こさせる。今日では「応答」は「責任」と同様にますます外から課せられた強制行為という文脈に浸しこまれ始めている。またそうなることで、「責任」と同様ますます外交辞令風の形骸へと化し、その人間的・実存的内容性は空虚化しだした。そうした変質の基盤をなすものは「イジメ共同体」経験であり、この経験、この心理背景が——応答義務の「焦燥感」としても、またそれを生む「応答への飢餓」不安としても——おのれの威力をさらに貫徹するうえでの最も効力あるシステム・技術として LINE を発見したのだ。事柄が産みだされる連関の順序はそうだ、と私は考える。

3 共同性のポジティブな経験、あるいは基礎経験

ヘゲモニー の主導権争い

しかしながら、私はここで声を大にしていいたい。まさに、先に述べてきた今日の事態は現代日本の青少年の実存的危機であるがゆえにけっして彼らの精神と生活の全体を覆い尽くすものではない、と。危機とは、もはや縫合不可能となった分岐における突きつけられた回避不可能な選択のことにほかならない。危機のダイナミックス、その全体構造を把握するためには、それが——私の言葉を使えば——「基礎経験の主導権争い」における態度決定の問題であることを理解しなければならない。

では、その主導権争いにおいて他方の契機とは何か？ それは「共同性のポジティブな経験」の契機にほかならない。私は、「私のイジメ経験」についてのレポートを求める授業では必ずといってよいほど次に「私における共同性のポジティブな経験」のレポートを求めることにしている。またそれを「私

のイジメ経験」と同様にフィードバックすることになっている。

「共同性のポジティブな経験」という場合、私はだいたいそれを次のメルクマールによって特徴づける。すなわち、第一に、それがイジメのような否定のための否定・破壊のための破壊といったサディスティックな快樂目標ではなく、何らかの創造と建設を第一義とする実践のなかで誕生する共同性であること。たとえばスポーツのなかで敵チームを打ち破ることが問題になったとしても、それは相手に勝つほどの新たなプレイの創造によってこそその勝利であるから、ポイントは自分たち自身の側の創造と建設にあることは明らかであろう。

第二に、その実践のなかで真の仲間性の経験が誕生することである。それが誕生するためには次の諸契機が不可欠となる。一、全メンバーが自分のパート・ポジションの役割を自覚するために自分の立場と全体の立場とのあいだを往復できる視点を備え、全体方針の決定に必ず参画でき、かつ参画する意欲をもてること。二、メンバー相互のあいだに「彼のなかに我を見、我のなかに彼を見る」真の相互性が成立すること。いいかえれば、杓子定規にではなく、相手の状況や立場を相互に思い遣って役割分担を決め、かかる思い遣りの相互性への感謝と信頼があるからこそ、全メンバーが自分の役割責任を断乎として引き受ける自発的決断が誕生すること。三、このプロセスの積み重ねのなかで、各自がその短所にもかかわらず、その独特な長所によって、かけがえのなさ・代替不可能性を帯電したメンバーとして承認され、擁護され、感謝され、支持されること。四、かくて共同目標の追求の実践のプロセスそのものがメンバー一人一人の個性のあらためての再評価であるだけでなく、その隠れた可能性の発見であり、そ

の相互承認と称賛であること。つまり仲間性の再生産であり新生産であること。

ここで私が強調したいことは、このようなメルクマールを明示して「共同性のポジティブな経験」の有無を尋ねれば、実に豊富で愉快な心を明るくする実践経験が、あれほどの暗鬱な「イジメ経験」の堆積のさまが本当かと疑われるほどに、学生から提出されるという事実である（紙数の関係でその一端さえ提示できないのが残念である）。つまり、それはいかにも矛盾だが、否、より正確にいえば、まだ矛盾へと高められていない反対要素の併存だが、この併存こそが実はわれわれの生活・生命活動のリアリティーであり、この併存を矛盾にまで高め、解決への苦闘を生みだすことこそがそのダイナミックなのだ。この矛盾性・対立性の潜在的動性があるからこそ、われわれの生命活動・活きた実践的生活は、——私の言葉を再度用いれば——「基礎経験の

ヘゲモニー主導権争い」として問題設定され、この闘争的相貌のなかで、君はどちらの経験をこれからの君の生——その生の構想、それを支える世界観、価値観、美意識等々——が立脚すべき基礎経験として選択するつもりなのか、そのような実存的決断の突き詰められた問いが提出されねばならないのである。

くりかえしいう。私はいまこう感じている。問題をどれだけ鮮明に闘争的相貌の下に提出することができるかが鍵だ、と。いかなる「基礎経験のヘゲモニー主導権争い」がわれわれの生活を貫いており、いかなる「あれか、これか」の前にわれわれが立っているかをどこまで鮮明に打ち出せるか、これが鍵だと。

この点では、機会があれば、先の「ネットに救われた」と書いた学生に話してみたい。君は「ネットに救われた」ことによってネットは救いの機能を持ち、だからわれわれはまた「イジメ共同体」に対抗

するまさに新しき武器を現に手に入れつつあることを証明した。だからこそ、今度は君がネットを新たな「共同性のポジティブな経験」を生み出す何らかの共同実践のツールへとバージョンアップする術を模索し、その模索のなかで君自身が実際に何らかのそうした共同実践に参画し、それを生きる喜びを経験するべきだ、と。君はこれまで十分に「文字で会話する」ことは学んだのだから、その学びに、実践の文脈に浸された、ふんだんに身体的諸要素（表情、声音、仕草等）によって補われる、未完であることに、誤解にすら、むしろ実践のダイナミックなスピードとエネルギーと生気を感じる実践の会話、常にリアリティーと観念との衝突を孕み、その衝突をとおしてこそ観念のナルシシズムを打破し、観念をしてさらにリアリティーへと接近せしめる実践の会話、それについての学びを結合させるべきだ、と。救いとなった文字がむしろ実践の生気を絞め殺すことがある。多々ある。それを経験することこそ君の次の課題だ、と。

4 希望への賭け

ハーマンはトラウマからの回復を追求するカウンセラーとトラウマを負った者との関係を「治療同盟」と呼び、またR・D・レインにはこういう一節がある。「それを通じてこの破断（私風にいえば Call & Response 関係の裂断——清）が修復される『関係』は、専門語で『治療上の関係』と呼ばれているものであると否とは問わず、必ず『治療的』なのだ。人間としての連帯、仲間どうしであること、そして親交といった『感^{センス}』の喪失は、さまざまな仕方で人々を冒す」（レイン 1986 : 58）。

私はこのハーマンとレインの観点に寄せてかつておおよそこう書いたことがある。

肯定的基礎経験は破壊され否定的基礎経験によって代位されてしまう。だが、実は完全に破壊され代位されたのではない。それはまだなお回復し再生する力を保持しながら、とりあえず、心的外傷の発揮する圧倒的な基礎経験的力によって抑圧され、無力化されたのだ。つまり、そこにはどちらの経験が基礎経験の地位を占守するか的主导権争いがなお密かに闘われ続けているということだ。肯定的基礎経験への渴望の実存的切実さはその強度によって量の小ささを突破する。たった一回の出会いが無力化の重しを転覆する再生力を与えてくれるかもしれない。この再生力がなおまだ果たしてどの程度の力として保持されているのか、それは一旦奪われた基礎経験的地位を心的外傷経験から奪い返して再生を果たすほどのものとしてあるのか？ 実のところ、人はこの再生力への《信仰》なしには心的外傷からの回復を追求する《治療》という実践的立場に立つことはできない。回復が可能となるか否か、それは厳密な実証的検証にかけられるべき可能性の数量化の問題ではない。可能だと信じて取り組む以外にないという問題がそこにはある。《治療》という人間関係、あるいは人間への投企・賭けは、この人間への《希望》あるいは《信仰》なしには成立しない。敢えていえば、それは《治療》という人間関係の宗教的根底だといってもよい。（清真人 2007 : 42-43）

最後に次のことを報告してこの論考を終わりにしたい。

先に紹介した、かつて自分を捉えた殺意を告白するレポートを書いた学生は、私の授業でジョン・レノンの名曲「マザー」を聴き、次のようにコミュニ

ケーション・ペーパーに書いてきた。

「ジョン・レノンの生い立ちの中で生まれた孤独と彼の歌を聴いたことで、とても救われたと感じました。胸の中の腐った巨大な肉塊のような存在が切り取られ、彼が持っていつてくれたような感覚がします。私の場合はネグレクトではありませんが、父がとても攻撃的な反応しかしないので、父からの反応に何も期待せず、幼い頃からあきらめていたので、今も私は父に対して無反応もしくは無関心的な反応、攻撃的な反応しかできずにいますし、少し憎んでいます。しかし、ジョン・レノンの孤独の話と彼の曲、特に Mother を聴いて、『私は愛されたかったのか』とずっと胸に落ち着きました。まっとうな Call & response がのぞめない孤独感がこの曲のさいごの叫びによって発見され、融かされたようです」。

この時の授業では、2003 年に放映された NHK「クローズアップ現代」の「赤ちゃんが笑わない」というネグレクト乳児の問題を取り上げた番組の DVD を見てもらい、親との Call&Response の絆を失った人間は、すでに乳児の段階でいかに「世界のなかで生きる基本的信頼感」(J・ハーマン)を喪失せざるを得なくなるかという問題を提起し、その締めくくりにジョン・レノンの「Mother」を聴いてもらった。それは、彼自身が幼児期に体験した両親から棄てられることの苦痛と不安を絞り上げるように歌った曲として著名である。

私はその時、同時に彼の「Oh my love」と「Love」も流し、彼とオノ・ヨーコとの出会いのエピソードも紹介し、彼の歌手人生がヨーコとの出会いをとおりして、彼がこのトラウマから「愛を得て」いかに自

分を解放するか、自分自身に「yes」といい得る自己肯定感をどのように獲得するかの実存的ドラマに貫かれたものであったかを強調した⁽⁵⁾。

注

- (1) 拙著『創造の生へ—小さいけれど別な空間を創る』はるか書房、2007 年、第 I 部第 1 章「イジメ経験は何をもたらしたか」16-28 頁。
- (2) 参照、拙著『創造の生へ』30 頁。
- (3) 参照、拙著『創造の生へ』31 頁。
- (4) 参照、拙著『創造の生へ』107-110 頁。
- (5) このエピソードをめぐっては拙著『創造の生へ』(27-28 頁)にも書いた。

参考文献

- 清眞人 (2007) 『創造の生へ—小さいけれど別な空間を創る』はるか書房
- ジュディス・L・ハーマン (1996) 『心的外傷と回復』中井久夫訳・小西聖子解説、みすず書房
- E. フロム (1991) 『愛するということ』(新訳版) 鈴木晶訳、紀伊国屋書店
- R. D. レイン (1986) 『レインわが半生』中村保男訳、岩波書店

清 眞人 (近畿大学)